

謡曲「邯鄲」をめぐる

柴田 哲谷
愛知学泉大学

A study about “Yokyoku (Noh song) KANTAN”

Tetsuya Shibata

キーワード：主題 Subject、太平記 TAIHEIKI、沈中記 CHINCYUKI、出離 Buddhism

1. はじめに

2017年6月17日、名古屋城能楽堂にて名古屋宝生会の定式能が催された。演目の最後は、「邯鄲の夢（一炊の夢）」をモチーフとする「邯鄲」である。白鉢巻きに邯鄲男の面を付けた和久莊太郎師のシテは、端正な所作とよくとおる声によって、主人公廬生の夢と現実を生き生きと演じきった。

この曲は、現実と夢の落差が要で、演者の工夫の見せどころもそこにあると思われるが、いわゆる夢幻能ではない。すなわち、諸国一見の旅僧（ワキ）がシテ（死者や超自然的存在である主人公の変身した姿）に出会う、シテは昔語りをしてその主が自分だと告げて消える、ワキの夢に往年の姿で現れたシテが執心や悔恨を語る、ワキの回向によってシテは成仏する、という構成を持たない。

浮き世（人生）に迷う廬生は、旅宿で見た夢によってその本質を悟る。謡曲「邯鄲」は、唐の「枕中記」及びこれを元にした「太平記」の「黄粱夢事」に拠るとされるが、これらをどのように承けているのだろうか。本稿は、この点について少し吟味する。

2. 謡曲「邯鄲」の内容と主題

本稿は、演出やシテの演技に言及するものではない。対象は、演劇の総体としての「能」ではなく、脚本である「謡曲」である。

(1) 概要

蜀国の青年廬生（シテ）は、人生の何たるかを求

めて楚国の羊飛山へ向かう。その途中、邯鄲の里に投宿し、宿の女主人（アイ）から「来し方行末の悟り」を開くという不思議な枕を勧められる。早速昼寝をした廬生は、楚国の勅使（ワキ）に起こされ、王位を譲ると告げられて王宮に連れて行かれる。王として栄華の日々を過ごすうちに50年が経ち、大臣（ワキヅレ）から仙薬の酒が献上されて宴会となる。御前では童子（子方）が舞い、続いて廬生も舞楽を舞って弥栄の栄華を喜ぶ。するとやがて、女御更衣も大臣たちも宮殿楼閣も消え失せてしまう。そこへ宿の女主人が粟の食事ができたと告げに来て、廬生は栄華が全て夢だったと知る。彼は悟りを得たと喜び、故郷へ帰っていく。

(2) 構成

野上豊一郎『註解謡曲全集』に拠り、同書の場面分けに沿って内容をまとめてみる。

1) 第1場（序の段）：唐国、邯鄲の里

① 宿の女主人が、仙術を心得た人から得た、来し方行末の悟りを開かせる「邯鄲の枕」を所持している旨を述べる。

② 廬生が登場し、仏道も願わず茫然と生きる生活を打開するため楚国羊飛山の智識（高僧）を訪ねる旨を言明する。道行（地謡）があつて、邯鄲の里に到着する。

③ 宿が決まる（シテとアイのやりとり）。

④ 女主人の問いに応じて廬生が旅の目的を告げると、「邯鄲の枕」を勧め、一睡の間に粟の食事を用意すると言う。

⑤ 廬生は天恵と思い、早速その枕で昼寝をする。

2) 第2場（破の段）：楚国の王宮（夢の中）

- ① 楚国の勅使が現れ、廬生に王位を譲るとの勅定を伝える。不審に思う廬生に、勅使は瑞相があるからだと説明し、参内を急がせる。廬生は天にも昇る気持ちで輿に乗る。
- ② 雲龍閣・阿房殿といった宮殿や都城の華麗さが語られる（シテと地謡）。
- ③ 在位 50 年にあたり、大臣が栄華長久を期して仙薬の酒を勧め、廬生はこれを受ける。
- ④ 酒宴が催され、舞人（子方）が舞い、廬生も舞う。
- ⑤ いつしか時が過ぎ、栄華の夢が覚めてしまう（シテと地謡の掛け合い）。

3) 第3場（急の段）：邯鄲の宿屋

- ① 宿の女主人が粟のご飯ができたと言い、廬生を起こす。
- ② 廬生は目覚め、50 年の栄華も一炊の夢なのだと知り、人生の迷いから解き放つ智識はこの枕であったと気づき、感謝して故郷へと帰っていく（シテと地謡の掛け合い）。

(3) 主題

上記のように内容も構成も単純である。生き方に迷う青年が昼寝の夢によって人生の本質を悟る、これだけの内容が夢と現実の往還、一青年と帝王という立場の入れ替わりの中に端的に示されるだけである。これが「作り物語」だったならば、はたして読者に受け入れられるだろうか。

野上氏は、夢による主人公の変化を重く見て次のように言った。

単なる遊樂物ではなく、遊樂をその一成分として持つ戯曲的構成の上に立ってゐる。主人公の心境も一炊の夢の中に置いて、醒めた廬生はもはや寝る前の廬生ではなく、すでに一大事を体得した得脱の人でなければならない。¹⁾

こうした理解を支えるのは、栄華にある主人公の高揚を華麗な章句を連ねた謡と奏樂を背景に舞い表し、現実に戻っての驚きとそれが落胆ではなく悟りの喜びであることを表現する、シテの技量であろう。

このような「邯鄲」において、原典はどう踏まえられているのか。

3. 「太平記・黄梁夢事」の内容と主題

謡曲「邯鄲」の作者は、「二百十番謡目録＝観世太

夫歴代二百十番謡撰作記」に「元清」とあることから世阿弥とされる一方で、不明とする記録（「能作者付」）もある。世阿弥作とする資料があるなら、少なくとも世阿弥時代すなわち 14 世紀末期から 15 世紀中期の作ではあるだろう。1370 年頃には成立したとされる「太平記」を「邯鄲」作者が参照するのは、無理がない。以下、長谷川端校注・訳『日本古典全集』をテキストとして用いる。

(1) 内容・構成

「邯鄲の夢」の話は、「黄梁午炊の夢の事」（「梁」は正しくは「梁」）の題で載っている。「世間に定かなき事をば、俗の諺にも夢幻とこそ申し習はして候へ」と書き出され、「聖人に夢なし」「如夢幻泡影の仏説」「大槐蟻宮南花の夢」などの諺や話（題名のみ）を挙げた後、「殊にあはれにをかしきは、黄梁午炊の夢にて候ふなり」²⁾と、夢というものはかなさの典型として紹介されている。内容は次のとおり。

1) 邯鄲の枕で眠る

時代は漢朝。才能豊かだが貧しい青年廬生は、賢才を求めていると聞いて楚国へ赴く途中、邯鄲で休息する。大空を通過していた回道という仙人が、廬生の願いを憐れんで富貴の夢を見せる枕を貸し与えた。

2) 栄華を味わう

楚国の諸侯から使者が来て、多くの進物をもって廬生を召し出す。諸侯の館では、同席した楚王から政道や兵法について問われ、その答えが諸侯を感服させた。楚王は彼を大臣に任じ、やがて二十数年が経つ。楚王が急死し、楚の姫は国の存亡を案じて自ら廬生の妻になった。

以後、美しい衣服や贅沢な食事、多くの客を招いての酒宴など、楽しみを尽くして 51 年目に男子が生まれる。大臣たちはこの子を楚王に即ける。周辺民族も従い、諸侯も来朝して国は栄えた。

王子が 3 歳になったとき、洞庭湖に 3 千余艘の船を浮かべ、数百万の風流人を集めて宴を催す。その美しさは、梵天や帝釈天の宮殿をしのぐほどであった。3 年 3 ヶ月の歓楽が終わるころ、王子を抱いて戯れて船端に立っていた夫人が、誤って王子と共に湖に落ちてしまう。

3) 目覚めて悟る

侍臣があわて騒ぐ声で、廬生は目覚める。振り返ってみると 51 年の歓楽も昼食時の一眠りに過ぎな

かった。廬生は、一生の楽しみも眠りの中の夢だと悟り、楚国へは行かずに遁世して、終生名利を求める心を起こさなかった。

(2) 主題

貧しい青年が楚国へ赴く途中、邯鄲の枕で見る夢で栄達を果たし、目覚めてそのむなしさを悟るという大筋において、謡曲「邯鄲」と共通する。謡曲がこの話を下敷きにしたことは疑いない。

旅に出る青年の目的は才を生かして栄達を果たすことであり、生き方を求めて善知識を訪ねる謡曲の設定とは異なる。が、栄華の描写は具体的で、それゆえ、その暗転の縁で目覚めるという展開は、名利のむなしさを悟って遁世するという帰結を円滑に導いている。

出発点は異なるものの、謡曲と太平記の主題はほぼ同じと考えてよい。

4. 「枕中記」の内容と主題

「枕中記」は、中唐に活躍した沈既済が著した物語で、後に伝奇と言われた。既済は歴史家で、右拾遺史館修撰や礼部員外郎の職を歴任した。

(1) 内容

次のように書き出されている。

開元七年。道士有呂翁者、得神仙術。行邯鄲道中、息邸舎、振帽弛帶、隱囊而坐。俄見旅中少年。乃廬生也³⁾

ここには年号が明記されており、まず登場するのは呂翁である。この作品は、玄宗朝の史実を踏まえている点に特徴があるとされる。以下、内田泉之助・乾一夫校注・訳『新釈漢文大系』に拠って内容をまとめる。

1) 邯鄲の枕で眠る

開元7年、道士呂翁が邯鄲の宿屋で休んでいると田んぼへ行く途中の廬生が来合わせた。歓談するうちに自身の人生を嘆く廬生に、苦痛も病もないのに嘆くわけを問うと、功名を立てて相将となり、贅沢に暮らし、家を栄えさせて初めて楽しいと言えるのに、学芸に秀でた自分がいまだ野良仕事をしていることが苦痛だと言う。そこで翁は囊中から枕を出し、望みのように栄達させようと言った。枕の両端には穴が空けてあり、廬生が頭をつけると穴が大きくな

り明るくなって、そこへ入ると自分の家に着いた。

2) 栄華を味わう

数ヶ月して崔氏の娘をめとる。妻は美しく、財産も増えた。翌年、進士に合格して秘校(校書郎)となる。以後、渭南の尉、監察御史、起居舍人・知制誥を歴任し、同州、さらに陝州の牧(長官)に就いた。廬生は土木工事が好きで、陝西から運河を掘って船が通れるようにしたので、人々は喜び、石碑を建てた。

汴州に転任し、河南道採訪使となり、召還されて京兆の尹(長官)に就任。吐蕃が侵攻するに及んで、皇帝は廬生を御史中丞・河西道節度使に任じる。彼は敵七千を討ち取り、国土を広げ、城塞を築いたので、辺境の人は石碑を建てて讃えた。吏部侍郎に転じ、戸部尚書兼御史大夫に上った。清く重厚な人柄は人々の馴れ親しむところとなったが、宰相に疎まれて飛語をもって端州の刺史に左遷された。

3年後、召還されて常侍(侍従)となるや、時をおかず同中書門下平章事(中書令で宰相職)に就き、中書令蕭嵩、侍中裴光庭と共に十余年間政務を執る。天子の命を日に何度も受け、善を進めて悪を止めさせたので、名宰相と呼ばれた。ところが、同僚が妬み、辺境の將軍と結んで謀反を企てていると讒言する。調査の勅命が下り、逮捕されそうになった時、自分は山東に住んで田地を30町歩持ち、飢え凍えをしのぐには十分であったのに、どうして官禄を求めたのか、今や粗末な衣服を着て馬で邯鄲の街道に行くこともできないと妻子に語り、自刃しようとした。妻が止め、死を免れる。疑いを掛けられた者は全て死んだが、廬生だけは宦官に助けられ、驩州へ流された。

数年後、皇帝は廬の無罪に気づいて、中書令とし、燕国公に封じて慈しんだ。廬は5人の男子をもうけたが、皆才知があり、儉は考功員外郎、伝は侍御史、位は大常の丞、偶は万年県尉、倚は最も賢くて28歳で左襄(左相)になった。姻戚は皆人望のある家柄で、孫も十余人できた。

彼は50余年の間に2度辺地に流され、2度宰相となった。位を極め、贅沢と遊びを好み、賜った田地、邸宅、美女、駿馬は数え切れなかった。

後年老いて辞職を願うも許されず、病に臥すと名医や薬を賜った。臨終に及んで上表文を奉ると皇帝も驃騎大將軍の高力士を見舞わせるとの詔を下すが、その日の夕方亡くなった。

3) 目覚めて悟る

廬生はあくびとのびをして目覚めた。すると宿屋で寝ていて、呂翁が傍らに坐し、主人は黍を蒸しているが蒸し上がっていない。廬生は飛び起きて「夢を見ている間だったのか」と言い、呂翁は「人生の榮適もこのようなものだ」と言った。放心していた廬生はやがて、「名誉と恥辱の道程、困窮と榮達の運命、成功と失敗の道理、生と死の実情はすっかり分かりました。これは先生が私の欲心を止める方法だったのですね。ありがたく教えをお受けします」と礼を述べ、丁重にお辞儀をして去った。

(2) 主題

人生に不満を持つ青年が道士の持つ不思議な枕によって榮華を味わい、目覚めてその本質を覚るという内容だが、これに類する話は唐代以前からあった（例えば六朝時代の「幽明録」）らしい。

しかし、この作品は単純な神仙譚ではない。目を引くのは、廬生が歴任する役職が多彩で、浮沈もダイナミックなことである。廬生の榮達過程には、権門貴族でなくとも試験によって高官となる道が開かれ、職掌での働き如何で国政を執ることもできた唐代の政治環境が前面に押し出されている。乾氏は、廬生の世界は「玄宗朝の歴史的事実をそのまま、しかも編年的に繰り込んである」⁴⁾、すなわち開元 7 年（719）から天宝年間（742～755）後半にかけての歴史的事実そのものであると指摘している。

この作品が小説として成り立つとすれば、青年が夢を通して人生の実相を悟るという伝統的説話に、時代にふさわしいリアリティをまとわせた功によるものである。

「枕中記」や「人虎伝」が盛唐末から中唐にかけての政治的・社会的混乱（安史の乱）を背景に成立したということは、注目に値する。官僚や知識階級は自身を恃む心の裏に不安や無力感を抱いていたはずであり、それが作品に投影されるのは自然だからである。詩が爛熟し、文章への新氣運も開けつつあった中でも、伝奇は怪異や奇瑞に仮託してそうした思いを表現する形式として好適であった。

「枕中記」の主題は「邯鄲の枕」「邯鄲の夢」といった成語に集約され、『広辞苑（第二版）』が「人の世の榮枯・盛衰のはかないたとえ」とするのをはじめ、『明鏡国語辞典』など他の辞書でも同様に解釈されてきた^{注1)}。

これに対して下定雅弘氏は、廬生のそもそもの疑問が「吾此苟生耳、何適之謂」であり、呂翁の応答が「此不謂適、而何謂適」であったことに注目し、作品の本質は人生の「適」とは何かにはかならないと指摘する⁵⁾。呂翁が示したのは、榮達を遂げ榮華の中で亡くなった、その夢の内容そのものが廬生の望んだ「適」の実態にはかならないということだ。廬生は翁の言葉を玩味し、「夫寵辱之道、窮達之運、得喪之理、死生之情、盡知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不受教」と受け止めた。人間の際限ない欲望の果ては貶謫や死であり、「適」ではない。この物語の主題は、欲望を抑えて生きることが「適」だということであって、人生のはかなさ（無常観）の表明ではない。この見解は、官僚社会にあって浮き沈みした沈既済の問題意識にも即し、傾聴に値する。

5. 謡曲「邯鄲」の特質

典拠とされる「太平記」と「沈中記」との異同を見つつ、謡曲「邯鄲」の特質を考えていく。

(1) 3 作品の異同

「謡曲」と「沈中記」と「太平記」の異同を、三多田文恵氏は「謡曲『邯鄲』の成立とその背景」において、①廬生の願望、②宿の女主人の役割、③勅使の役割、④邯鄲の枕とその効力、⑤現実の場面描写、⑥夢の場面描写、⑦夢から覚めた後の廬生の境地、という 7 つの観点から調べている。ひとまず、これに沿って見ていく。

三多田氏は、7 つのうち④⑦は和漢の典拠と謡曲は一致すると言う。枕によって廬生が夢の世界で一生を閑したことは 3 者に共通するから、④はもつともである。ただ、他の 2 者では仙人が、謡曲では宿の女主人が枕を渡す点が異なる。主人は仙術を行う人から譲られたのではあるが、廬生に直に接していない分、道教的な趣が薄められているとも見える。

⑦について氏は、謡曲では求道の望みを叶えて悟り、他の 2 者は榮達の願望に反して悟るという違いはあるものの、人生の心理を悟る主題・結末において一致することから、謡曲は典拠を忠実に踏まえていると判断する。これについては、上に見たように、現実世界での生き方を志向する「沈中記」と出離・遁世に結ぶ他の 2 者は異なっている。

他の 5 つについて三多田氏は、謡曲と典拠 2 者と

の相違を見出している。①について氏は、謡曲「邯鄲」では仏教的願望であって、2 者が立身出世であるのとは異なるとして、その理由を、乱世にあって来世を願う人々の普遍的な現象に求めている。それゆえ、謡曲での仏道志向は多いとも指摘する。異存はないが、⑦との照応も意識しておきたい。②③は能の演出に関わる問題なので措く。⑤に関する指摘の中では、主人公廬生が宿屋に至る経緯が注目される。「沈中記」は野良仕事に出る途中、すなわち日常の中で、謡曲と「太平記」は楚国への途次、すなわち日常から離脱の過程で、という相違があるのは、謡曲「邯鄲」の直接の典拠を示唆するようで興味深い。

三多田氏は⑥に関し、「沈中記」の現実性（出世と失脚）に対する謡曲と「太平記」の非現実性（楚王、楚王の女婿）を指摘して、謡曲が原拠よりも「太平記」に拠ったと言ひ、その理由を次のように考える。

謡曲『邯鄲』の山場は夢の場面だが、劇化した場合、現実的な出世物語を演じるよりも、庶民が突如として巨万の富と権力と名誉を手中に収める夢物語を演じる方が、観客に強烈なインパクトを与えることが出来、観る者の興味を引く。謡曲では話の面白さと同時に視覚的な面白さも追求し、『太平記』に倣ひ、極端な栄華物語を展開させているのであろう。⁶⁾

こうした見方を斥けるわけではないが、「沈中記」が枕の霊力を語る中に「欲望を抑えて生きる」（下定氏）という現実的处世論を押し出している点からすると、演出効果を狙ってというよりも、能作者の意図した主題に「太平記」が合致したと考えるのが自然だ。

(2) 「唐物」としての「邯鄲」

謡曲「邯鄲」には、「天の濃漿」、「仙家の酒」、「仙の盃」、「菊水の流」、「月人男」、「雲の羽袖」などの言葉が頻出する。神仙の要素を混入させて異国の雰囲気を出しているのだ。

世阿弥は「風姿花伝」（第二 物学條々）で、「邯鄲」のような「唐物」について次のように書いた。

是は、凡、格別の事なれば、定（めて）稽古すべき形木もなし。たゞ、肝要、出立なるべし。又、面をも、同じ人と申（し）ながら、模様の變りたらんを着て、一體異様したるやうに、風體を持つべし、劫入（り）たる爲手に似合ふ物なり。（中略）常の振舞に風體變れば、何となく

唐びたるやうに、よそ目に見なせば、やがてそれになるなり。⁷⁾

中国に取材した「唐物」では、観客の目に映る形が大切なのだ。素材の主題や味わいといった中身はもちろん、形の写実にさえもこだわらない。観客がそれを中国風と見るか否かのみが問題なのである。

謡曲「邯鄲」は、「邯鄲の枕」の故事に取材したが、「沈中記」を踏まえたとは言ひ切れないようだ。

(3) 仏教への親和

上に見るとおり、謡曲「邯鄲」は「太平記」を承けている。「邯鄲」が世阿弥（1363～1443 年）作であれ、同年代の他者の手になる作であれ、1370 年に成立したとされる「太平記」とは近接しており、影響を受けたことは間違いあるまい。

「太平記」が描く世界は、後醍醐天皇の即位（1318 年）から鎌倉幕府滅亡、建武の新政、室町幕府成立、2 代将軍足利義詮の死去（1368 年）までの 50 年間だが、この間、戦乱と荒廃に苦しんだ人々が鎌倉時代から世に浸透しはじめた仏教（浄土宗、日蓮宗、浄土真宗など）に傾斜するのは自然であった。^{注2)}

1330 年ごろに成立した「徒然草」で兼好法師は、無常の世を見据え、

大事を思ひ立たむ人は、さがりがたく心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。（59 段）⁸⁾

と、出家遁世に向けての心構えを説いている。

能は神事と縁が深いが、仏教とも深く繋がっている。「開口」によって場面を現出させ、妄執に苦しむ霊（シテ）を成仏させて一番を納めるのは、多くは諸国一見の僧（ワキ）である。詞章にも、「草木国土悉皆成仏」（「定家」「杜若」他）や「南無阿弥陀仏」（「当麻」「実盛」他）、「光明遍照、十方世界念仏衆生、攝取不捨」（「忠度」）といった文言がよく見られる。

謡曲「邯鄲」は、栄華の 50 年が「一炊の夢」だったと判明した後、次のように終わっている。

シテ「南無三宝南無三宝、

地よくよく思へば出離を求むる、智識はこの枕なり。げにありがたや邯鄲の、げにありがたや邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て望みなかなへて帰りけり。⁹⁾

夢中の体験によって俗世を離脱する確信が得られたのであり、これは、茫然と生きる生活を打開しようとした廬生の当初の問題意識と照応する。

このように悟りや成仏によって一番を締めくくる能は多い。例えば、世阿弥作「清経」は、

……これまでなりや、まことは最期の十念乱れぬ御法の船に、頼みしままに疑ひもなく、げにも心は清経が、げにも心は、清経が仏果を得しこそありがたけれ。¹⁰⁾

と、主人公が成仏して終わっている。

出離するか否かは別として、また、謡曲に限らず、鎌倉仏教は中世以降の美意識や芸能（芸術）に深く根を下ろしていたようである。^{注3)}

6. おわりに

「邯鄲」は、一人の青年が夢中に人生を閲してそのはかなさを悟る物語であった。「邯鄲の枕」の紹介があつて青年の昼寝が始まる「序の段」と目覚めて悟りを得る「急の段」の現実性・日常性に対して、「破の段」で描かれるのは在位 50 年の賀であり、この間の治世の実態は全く示されない。楽と舞によって現出する栄華の様がひたすら押し出され、序・急との落差を際立たせる。出離の手立てを求めて高僧を訪ねようとする青年に対して、この極端な落差はその帰結を直截に、ゆくりなく突きつけるものであつた。この曲の展開からは、世を無常と見る意識とそれを踏まえての仏道に対する親和性を看取できる。

「邯鄲」は、処世の方途を旨とする「沈中記」よりも、時代背景を同じくする「太平記」を承けている。

和久師の廬生は、静かに目覚め、噛みしめるように「南無三宝」と呟いた。その悟りは深い。

引用文献

- 1) 野上豊一郎：『註解謡曲全集巻 4』, 中央公論社, 104 (1950)
- 2) 長谷川端校注/訳：『新編日本古典全集 56 太平記③巻第二十一～巻第三十』, 小学館, 281 (1997)
- 3) 内田泉之助・乾一夫校注/訳：『新釈漢文大系 44 唐代伝奇』, 明治書院, 67 (1971) *以下「沈中記」本文の引用は同書による。
- 4) 同上書, 80
- 5) 下定雅弘：「邯鄲の夢のほんとうの意味—辞典はみんなまちがっている— (中国文学の回廊) 2009.6.20 大阪狭山市公民館
chinese.art.coocan.jp/chinchuki2.html
- 6) 三多田文恵：謡曲『邯鄲』の成立とその背景, 中国中

世文学研究, 40, 75—86 (2001)

- 7) 久松潜一、西尾実校注：『日本古典文学 65 歌論集能楽論集』, 岩波書店, 355—356 (1961)
- 8) 佐竹昭広、久保田淳校注：『新日本古典文学大系 39 方丈記 徒然草』, 岩波書店, 137 (1989)
- 9) 1) に同じ。118 (1950)
- 10) 野上豊一郎：『註解謡曲全集巻 2』, 中央公論社, 187—188 (1949)

参考文献

- ・野上豊一郎：『註解謡曲全集巻 4』, 中央公論社, (1950)
- ・横道萬里雄、表章校注：『日本古典文学大 41 謡曲奥下』, 岩波書店, (1963)
- ・「観世アーカイブ (観世文庫)
<http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/kanzegazo/>
- ・長谷川端校注・訳：『新編日本古典全集 56 太平記③巻第二十一～巻第三十』, 小学館 (1997)
- ・内田泉之助・乾一夫校注・訳：『新釈漢文大系 44 唐代伝奇』, 明治書院 (1971)
- ・今村与志雄訳：『唐代伝奇集 (上)』, 岩波書店 (2014)
- ・林家辰三郎：『中世文化の基調』, 東京大学出版会 (1953)
- ・西尾実：『道元と世阿弥』, 岩波書店 (1965)
- ・末木文美士：『日本仏教史』, 新潮文庫 (1996)

注

- 1) 下定雅弘氏によれば、鲁迅『中国小説史略』や劉大傑『中国文学發展史』などは「功名利禄を追求する人々への風刺をこめた作品」と解し、また、人民文学出版社版『中国文学史』では、「富貴は煙のようなものであり、人生は夢のようなものだ」という消極的な出世間の思想」と説明しているという。
- 2) 林家辰三郎氏は、狂言「宗論」を分析する中で、室町以後、欣求浄土を唱えて農村に浸透した浄土宗と現世利益を認めて商人や手工業者に支持された法華宗の広がり、一揆を起こすほどの勢力に発展したと述べている。(『中世文化の基調』所収「宗教に於ける二つのたたかい」)
- 3) 西尾実氏は、中世文化が「道」に貫かれ、人間の主体的可能性を発掘するものであつたとし、その根底に仏道があつたと指摘している。また、鎌倉と比べ室町文化は特に芸能において禅的になり、「幽玄」、「わび」、「さび」といった美意識へ繋がったとも言う。(『道元と世阿弥』所収「道元から世阿弥へ」「中世文化に及ぼした禅の影響」)